

# イエメンの風土と建築

清水 正之

荒木 正典

## はじめに

イエメン共和国（以後イエメンと略称する）は日本から遠い。それは単に直線距離でも約8,000km離れているとか、今日でも空路でも直行便が無い為、19時間から連絡便の都合で42・3時間を要する、という物理的・時間的距離感だけでなく、国そのものが日本とは大いに異なるからである。先ず第一に日本はアジア・モンスーン地帯に位置し、四季が有り、中でも夏は高温多湿、一般に湿潤であるのに対して、イエメンは砂漠の多いアラビア半島の南端に位置し、明確な四季はなく、海岸地帯を除いて大気は乾燥している。次にイエメンはアラビア半島の近隣諸国とは異なり農業国であり、かつての日本も農業国であったが、その農業の中心は今も飽くまで水稻であるのに対して、イエメンは牧畜酪農を基盤としたソルガム・キビなどの雑穀及び果樹栽培を主とする農業である。ま

た歴史上は絶大な商業都市を擁した商業国であった。第3に日本には仏教・神道・キリスト教他多様な宗教が存在するが、全般的に見て所謂信仰心がそれ程厚いとは思えないが、イエメンではその国民の殆どがイスラム教の熱心な信者である。アラビア半島の諸国にはイスラム教徒が圧倒的に多いが、殊にイエメンは紀元628年サナアで改宗、景観的には勿論、その他全ての面に於てイスラム教抜きでは現在のイエメンは論じられない程その影響は大きい。

以上主な項目のみを拾い上げただけであるがこの他にも和辻哲郎の言う「風土」とその成因について二つの国を比較すれば様々な点で根本的な処での相違が挙げられる。しかしところが、イエメンに親しみを感じ、曰く言い難い程の魅力を感じるのは何故なのか。

上記の答として例えば現在のイエメンが発展途上国として位置づけられている原因の一端とも考えられる街の景観は近代的な建築群は未だ未だ少く、歴史を感じさせる工法で自然素材を使った建物類が圧倒的に多い。それが却って訪れる者に郷愁を呼び起させるとか、逆に日本とは余りにも異なる環境・景観に臨んだためにエキゾチックな感覚が刺激されたなどと説明してみる。確かに答として全く考えられない事では無いが、それで全てが説明出来たとは考え難い。

そこで日本とは斯くも異なるイエメンに親しみを感ずるのは何故か、イエメンの魅力とは何に由来するのか、状況を注意深く観る事によって上記の設問の解答を少しでも見い出すべく考察をすすめたのが本論の主旨である。

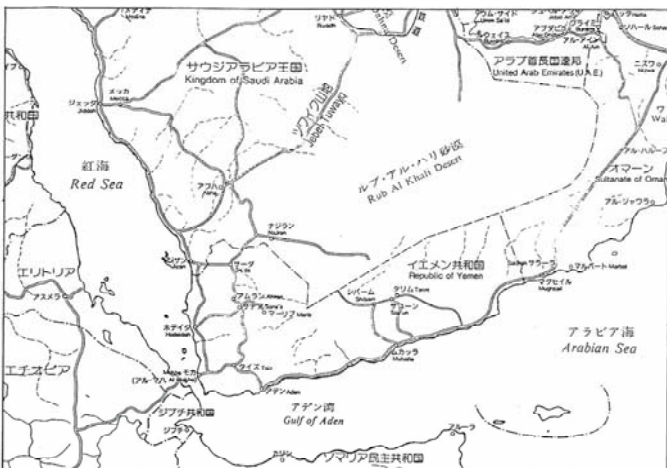


図 1

## 歴史

アラビア半島とアフリカは歴史上密接な関係が有るが、地質学的にもアフリカ大陸とアラビアは繋がっていた。恐竜が減んだと云われる白亜紀、その時代の末、6500年前から第三紀にかけて現在の紅海の部分が裂け、中から溶岩が出て、それが堆積してイエメンの山岳となり、同時にエチオピアの高い山々ができ、紅海が形成された。つまり、もともとアフリカとアラビアは一体であった<sup>(1)</sup>。

一方、イエメンに於ける人の歴史では「シバの女王」の名が有名である。「シバの女王」の物語はシバ王国の女王ビルキス (Bilqis) と古代イスラエルのソロモン王のロマンスであるとされその話のものは旧約聖書(列王記 上第十章) やコーラン (第二十七章「蟻」) に記されている。コーランに依る粗筋は『ダビデの子である古代イスラエルの王ソロモンはその叡智と権力を誇っていた。或る時、サバ (所謂シバ) 王国の女王は大層豊かで富んでいるが、彼女は神を崇めず、太陽を崇めている事を聞き、ソロモンはシバの女王を威嚇する。後に、女王は大変な量の貢ぎ物を持ってソロモン王に会い恭順する。その時授かった子供をエチオピアで産み、その男の子が以後1974年迄エチオピア帝国を支配する王家の始祖である。』と説く<sup>(2)</sup>。(アフリカ大陸に於て、1993年エリトリアが独立するまで、エチオピアとイエメンは紅海を挟んだ対岸国同志であった。)

シバの女王がビルキスであったかどうかは兎も角、シバ王国は紀元前950年に始まり、紀元前115年にヒムヤル王朝によって、他の南アラビアの諸王国と共に統合され滅亡している。現イエメンの首都サナア (Sanáa) から東へ約180km、広大な砂漠の入り口にワディ・ダーナ (潤れ河・Wadi Dhanah) が在る、その中にマーリブ (Marib) という街が在るが、そのマーリブ (New Marib) の南東郊外にかつてのシバ王国の首都マーリブ (Old Marib) が在る。

オールド・マーリブの南東3kmに「太陽の宮殿」(Arsh Bilqis) (写真1) と呼ばれ、その石に古代アラビア文字の刻まれた宮殿遺跡が、そしてそこから北東3kmには「月



写真1



写真2

の宮殿」(Mahram Bilqis) (写真2) と呼ばれ、その殆どが今も砂に埋もれたままの遺跡が在る。(今後本格的に発掘調査されれば南アラビアの古代史が書き替えられるに違いないと云われる。)

マーリブには二つの宮殿遺跡の他に紀元前8世紀頃に造られたダム(遺跡)が在る。マーリブ・ダムの水門の部分である。このダムこそイエメンの歴史上最も繁栄したシバ王国をその基礎の部分で支えた。

当時アラブの商人は南アラビア産の乳香、没薬、雪花石膏(アラバスター)、アフリカ産の象牙、ダチョウの羽、金、奴隷、ペルシャ湾の真珠、そしてインド洋経由で中国産の絹、インド、東南アジア産のスパイス、宝石、白檀、黒檀、刀剣と、まさに世界中の財宝を地中海諸国に運び大きな富を得た。特にアラブ商人は偏西風の存在やインド洋ルートを絶対に明かさなかった。その為、当時のヨーロッパ人は中国の焼物も絹もその他全ての産地は判らなかつた。所謂「香料の道」(海のシルクロード)であるが、マーリブはそのルート上に在り、しかも海路、陸路の中継地であると共に商品の集積地であった。シバ王国はルートを整備し隊商を保護することで「香料の道」を支配し通行税を徴収すると共に自からも通商によって大きな富を得た<sup>(3)</sup>。

さらに、エジプトやかつてのヨーロッパ諸国の神事・

祭事に欠く事の出来ないものとして乳香（フランキンセンス）と称する香料を薫く。乳香はカンラン科の植物から採れる樹液を固めたもので、原産地は現在のイエメンのハドラマウト (Hadahramawt) 地方とオマーンのドファール地方がその中心である。この乳香もアラブ商人は原料はおろか、産地を明かさない為、独占品となり金と等価まで値段を釣り上げ、ここでもシバ王国は富を得、隆盛を誇った<sup>(3)</sup>。

オールド・マーリブは最盛期にはその人口が5万人ともいわれる。ワディの中の街とは言え、その集散地を支えたのは、交易、乳香の輸出等々であるが、その基底は巨大なマーリブ・ダムによる豊富な水資源を利用した農業にある。

マーリブ・ダムはシバ王国の力が衰え滅びてからもマーリブをこの地方の中心とし続け、砂漠で最も貴重なもの、水を確保・供給した。この地方を支配した様々な国は何度も経験した巨大ダムの崩壊を多大な犠牲を払って、修理・維持し続けたが、紀元570年に起こった修理不可能なダムの決壊（理由は諸説有る）によってその使命を終える<sup>(4)</sup>。

ダムの水を放流した二つの水門の跡、高さ15mに積み



写真3



写真4

上げられた見事な石積、2800年前から1400年前に築造、修理された巨大なマーリブ・ダム（写真3・4）こそがイエメン建築の組積造の源であると考えられる。

イエメンは長い歴史（それも記された歴史）を持っているが、近代史は19世紀以降南北イエメンの分断等が有りやゝ複雑な為、年表で簡単に記す<sup>(5)</sup>。

19世紀初頭 イエメン全土が名目的にはオスマン・トルコの宗主権の下にあり、実質的には各地の実力者による群雄割拠状態であった。サナアはザイーディー派イマーム (Imam) が支配。ティハマ (Tihamah) 地方はエジプトのムハンマド・アリーの傀儡政権。アデン (Aden) 周辺はラヘジのスルタン (sultan) が実質支配。ハドラマウトは二大スルタン王国が拮抗。

1839年 イギリスによるアデン占領（アジア植民地への航路の中継地として。）

1869年 スエズ運河開通。運河が開通するまでアデン港はニューヨーク、リヴァプールに次ぐ世界第3の港でもあった。

1872年 オスマン・トルコ軍、イエメン支配強化のために北イエメンに進軍。オスマン・トルコ帝国による直接支配再開。

1879年 反トルコ感情を背景にザイーディー派のイマーム・ムハンマド登場。国内勢力を糾合してトルコ放逐運動を開始。

1904年 イギリスとオスマン・トルコ、南北イエメン境界線を策定。これにより南北イエメン国境が初めて発生。

1918年 第一次世界大戦の敗北でオスマン・トルコが撤退。サナアにイマーム・ヤヒヤによるムタワツキル王国が誕生し北イエメンを支配下に。同時に南イエメンの支配権をも主張し、イギリスとの間に衝突が始まる。

1944年 アデン植民地で全イエメンの改革を目指す「自由イエメン」運動発生。ムタワツキル王国の政策を批判し、イマーム家の打倒を目指す。

1948年 改革勢力によりイマーム・ヤヒヤ暗殺。息子のイマーム・アハマドが部族勢力を糾合して、改

革勢力を放逐したためムタワツキル王国打倒には失敗。アハマド死亡後はバドル皇太子が後継。

- 1962年 「自由イエメン」やエジプトのナセル大統領などに支援された軍人等による王制打倒革命発生（9月26日革命）。しかしバドルら王制派は逃げ延び、サウジアラビア諸国の支援を受け、王制派對革命派の内戦開始。
- 1963年 南イエメンのラドファン山中で反英独立闘争開始（10月14日革命）。
- 1967年 南イエメンからイギリスが撤退。  
イエメン民主人民共和国誕生。
- 1970年 内戦終結（王制派の一部が革命派と妥協し、イマームは排除される）。
- 1972年 第一次南北イエメン内戦。
- 1978年 第二次南北イエメン内戦。
- 1982年 第三次南北イエメン内戦（NDF内戦）。
- 1986年 南イエメンで内戦。アリー・ナーセル大統領失脚（1月13日事件）。
- 1988年 南北イエメン国境自由通行開始（サナア合意）。
- 1990年 南北イエメン統合（5月22日）。
- 1993年 第1回統一イエメン国会選挙実施。

以上、項目の列記に留めたが、イエメンは元来、部族内結束の非常に強い国柄であり、上記に掲げる規模ではない、或いは上記の要因となった所謂、部族間抗争は枚挙にいとまが無い。又、昨今は国家政府対部族の抗争も報道される。斯様に記すとイエメン人は如何にも好戦的な国民性の様に聞こえるが、現実に会い、話し、共に行動した人々は決してそうではなく、寧ろ穏やかで親しみ易く、大変親切でもある。もっとも、恥ずかしがり屋である為、人見知りをするという面は有っても闘争心旺盛とはとても見受けられない。前述の幾多の闘争の歴史はイエメン人の持つ誇り高い性格と非常に名誉を重んずる民族である事に起因すると考えるべきである。

## 風土

古代ローマ人はアラビア半島には三つのアラビアが有ると云った。「砂漠のアラビア」「岩のアラビア」と「幸

福のアラビア」(Arabia Felix) である。「砂漠のアラビア」はサウジアラビアを中心とした広大な砂漠地帯であり、「岩のアラビア」は現在のシリア、ヨルダン周辺の巨大な岩山が密集している地域を指す。そして「幸福のアラビア」が現在のイエメン、別名「緑のアラビア」である。

イエメンがフェリックス・アラビアとかハッピー・アラビアと呼ばれたのは前節に記した貿易で栄えたシバ王国に依るところが大であるが、アラビア半島に在り乍ら緑豊である事にも由来する。農業国イエメンの証しにかつてその名を世界に知られたモカ・コーヒーが有る。元々、エチオピアの標高1500mから2000mの範囲でカフェ・アラビカ種のコーヒーの原木が自生していた。アデンに居た僧侶がエチオピアに渡った時このコーヒーを飲み、覚醒作用があつて宗教修行に良い飲み物だとして愛飲されイエメンで栽培され始めたといわれる。飲み広まったのが15世紀半ばくらい、後にポルトガル人がやって来て飲み、ヨーロッパに伝播し、日常的に飲まれることとなる<sup>6)</sup>。

サナアの西のバニーマタル (Bani Matar) 地方 (写真5) (アラビア語で「雨の子孫たち」を意味する) はその



写真5

名の通り雨が多く、この辺りの年間降水量は約1500mm、多い処では3000mmを超える上に、山岳地帯でありしばしば霧がかかる。コーヒーの生育には理想的で品質の良いものが穫れた。一方、紅海沿岸にモカ (Makha) という港町が在る。モカはアフリカ大陸の南端喜望峰回りの航路が生まれた所謂大航海時代に入る迄、陸路、海路を継ぐ重要な積み替え港として、つまりモカを出てオマーンを経てインド、東南アジア、中国とヨーロッパ圏を結ぶ基地港として栄えた。バニーマタル地方で収穫し、モカ

から積み出したコーヒーが「モカ・マタリ」で、これがモカ・コーヒーの名前の由来であり、このコーヒーがイエメンの貴重な輸出収入であった<sup>7)</sup>。

イエメンの気候は、この国の地球上の位置と、僅か100km余の間に0mから標高3700m近くになる高低差によることが大きい。地理上の位置の特色については、例えば5月の終りから7月の終りまでの2ヶ月間太陽は首都イエメンの北に在る。即ち国土は二つの大気の流れの境界に位置しているのである。5月から9月の気候はイエメンの高地に向って南西から湿気を含む大気の流れの影響を受けて、主に1500m以上の西斜面に多くの降雨をもたらす。10月から2月は中央アジアの高気圧の乾燥した大気によって降雨の無い明るく澄んだ晴天の冬季となる。

地形上の特徴は、イエメンの主な分水界が紅海と平行して海岸より内陸側120から150kmを走り、イエメンを東部傾斜地と西部傾斜地という、二つの主要な集水域に分割している。イブ (Ibb) とタイズ (Ta'izz) の南東に位置する小さな地域は南側に流れ、アデン湾 (Gulf of Aden) に注ぐワディ (Wadi・涸れ河) によって排水される。



写真6 川のように見えるのは丸い河原石が反射して光っているものであり、水は無い

アラビア諸圏 (アラビア、北アフリカなど) で使われる語でワディとは涸れ河、涸れ谷の事で、雨の多い雨季には水の流れる川が現れるが、乾季になると川は消える (写真6)。水の流れは地表では見えなくなるが、その下に伏流水のあるのがイエメンの特徴で、それが植物を育みアラビア半島には珍しい緑の景観を形造っている。農業国イエメンの源であり、主な町の多くもワディに生まれた所以である。かつての南イエメン領内に属したイエメン東部の広大な砂漠に囲まれた都市サユーン (Say'un)、シバーム (Shibām)、タリム (Tarim) などアラ

ビア半島最大のワディ、長さ160km、幅は平均で2km、深さ300mの巨大な谷、ワディ・ハドラマウト (Wadi Hadahramawt) の中の谷底の町である<sup>7)</sup>。

首都サナアの西50km余にアラビア半島最高峰である標高3666mのナビー・シュアイブ山 (Jabal an Nabī Shu'ayb) がある。この山及び、それより少し南の都市ダマール (Dhamār)、そしてタイズ (Ta'izz) を頂点とした主要な7つのワディの各断面を次に示す (図2)。

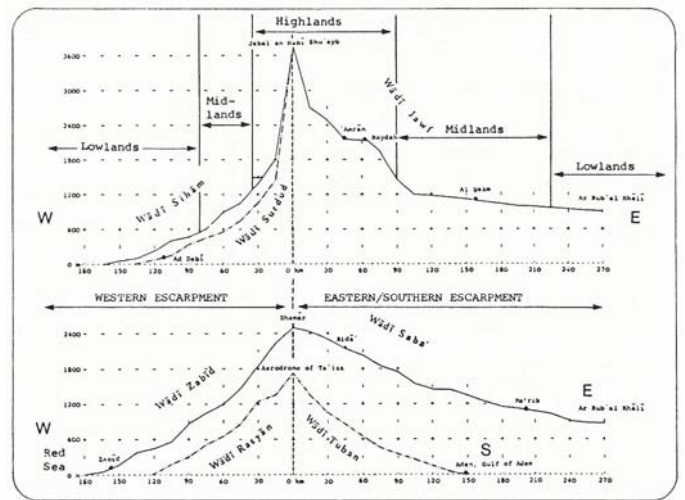


図2 7つのワディの流路に沿った地形断面：Wadi Sīhām, Wadi Surdud, Wadi Zabīd, Wadi Rasyān, Wadi Jawf, Wadi Saba', Wadi Tuban  
出典：Final Report P. 1/17

最も急な勾配が西側傾斜地の国の中央部、特にナビー・シュアイブ山の斜面で生じることを端的に示している、国の南部でも東側傾斜地の勾配が緩やかであることを顕著に表している。紅海に沿う形で南北に延びる低地であるティハマ (Tihāmah) 平野、このティハマ地方に向けて西に走る主要なワディは急斜面の水を集め、深く侵蝕された峡谷を流れ、さらに急勾配の山裾の狭隘部を抜けて多量の水をティハマ平野に流している。一年の大部分はワディの河床を細い小川が流れているだけである。上・中流部から遠く離れた下流域ではこの小川は殆ど完全に干上がってしまう。通常3・4月と7月から9月に何回かの洪水がワディの全流路に沿って生じている。国内の各地の農民達はワディの河床に堰堤を造り、洪水の防止に役立て、そして高度な分流システムにより水を農耕地へ導く。しかし、多量の水のため、分流ダムや灌漑システムそのものが押し流され、ワディのはるか離れた耕作地域にまで流れ込む事もあった。もし、全ての集水域

で多量な降雨があれば、出水の規模は紅海の海岸に達する程になるう。

分水界の東側のワディの傾斜は西側に比べ小さく、内陸地域における降雨は西側傾斜地のように季節的な規則性がなく降水量も少ない。一方、東側傾斜地のワディの集水域は西側のそれより広い。東側の傾斜は緩やかに高度を下げ岩山から開けた岩の大地となり、ついには隣国サウジアラビアに広がる大砂漠、ルブ・アル・ハリ (Rub' al Khali) 砂漠の入口へと継がる。そのルブ・アル・ハリの境界地域は毎年、洪水が膨大な氾濫となり、

交通網を数週間に渡って遮断している。嘗てはマーリブ、ジョウフ(Jawf)他の地域におけるダム建設や、簡略な分流システムによって、今日の耕作地域の何倍もの地域で耕作を可能にしていた。6世紀からルブ・アル・ハリ砂漠に接する堰堤の多くが破壊され続け、嘗て豊かであった地域の人口は相当減少したのである<sup>6)</sup>。

気候上の特色についてももう少し触れておこう。低地の日中の高温と高地の注目させられる低温は紅海の谷と山地帯の間に常に大気の循環をもたらす。日中、ティハマの熱気は西側山の麓からの斜面を登ってゆく、一方寒気は高地から沿岸の低地へ夜間に下ってゆく。

主な降雨はイップの地域と西側高地の斜面にもたらされる。殆どの降雨はごく限られた地域の激しいシャワーであるが、そこを通り過ぎれば突然全く雨の無い砂漠のような土地に出くわす。通常この地域には一年に二度の雨季が有る。最初の雨の時期は3月から4月にかけてであり、5月と6月は降雨が減少する。二番目はもっと強い降雨が7月から9月にかけてである。

次にイエメンの気候上の特徴により区分した各地域の気温と降雨量の表を参考として示す。(イエメンでは気候の正確な長期データが未だ無い・1975年)

イエメンの気候・風土上の地域区分は4つに分けられ

地域区分	標高	気候区分	月平均気温	年間平均降雨量
熱帯ティハマ地域				
少雨・多湿のティハマ海岸平野	0~50m	熱帯	25~35℃	0~80mm
少雨・低湿のティハマ中央平野	50~300m	熱帯	24~32℃	0~150mm
少雨から適雨の東側山麓ティハマ平野	300~500m	熱帯	22~32℃	0~300mm
熱帯から亜熱帯の西側傾斜地低部				
少雨・無降霜の低山地	500~1,400m	熱帯	22~26℃	200~400mm
適度の降雨の山岳傾斜地	1,400~2,100m	亜熱帯	16~24℃	300~600mm
温帯高地				
適雨から多雨の西側山岳高地	2,100~3,700m	温帯	10~18℃	600~1,800mm
適度の降雨の中央高地	1,800~2,400m	温帯	12~18℃	200~1,000mm
東側山岳亜熱帯地域				
一時的少雨の東側山岳地	1,800~1,200m	亜熱帯	16~24℃	100~400mm
東側砂漠	1,200~800m	亜熱帯	22~28℃	0~200mm

表1 イエメンの主な気候ゾーンの月平均気温と平均年間降雨量 出典：Final Report P.I/10

ている記述<sup>6)</sup>も多いが、いずれも3地域がはっきり異なる特徴として述べられているのに対し、残り1地域が明確さを欠き、分け方も記述によりさまざまであるため本稿では在イエメン日本国大使館発行(1996年10月、栗山専門調査員作成)の「イエメン案内」の記述による、海岸低地部・中央山岳高原部・東部砂漠地域の3つに分け、各地域の気候・地理・地形的特徴についてのみ概論しこの節の纏めとする。

1. 海岸低地地域——紅海に面し直ぐ東に3000m級の山並が絶壁のように連なり、巾は広い処でも50km程でアラビア半島の南端から北はサウジアラビアの国境まで続く細長いティハマ地方と、国土の南端でアラビア海に面する海岸地帯を含む。いずれも海を渡った湿気を含んだ熱い風が吹き、高温多湿である。雨は8・9月には降るが、降雨量としては少ない。冬の最低気温は20℃前後であるが夏は30℃を上まわることが有り、最高気温は冬で32℃か33℃、酷暑期は50℃を超える。主な都市にザビド(Zabid)主要港湾都市としてホデイダ(Hudaydah)、モカ、アデン、ムッカラ(Mukalla)などが在る。

2. 中央山岳高原地域——海拔2300mの高地に在る首都サナアを中心に南北に広がる3000m級の山が連なる山岳

地で緑も多く、イエメンが緑のアラビアと言われる所以である。高地のため気温も余り上がらず、サナアでは夏でも最高30℃くらい、冬の夜間は0℃近くまで気温が下がる。日中は乾燥しており過ごし易い。雨季は2回有り、特に8月の降水量が多く、場所によって土砂崩れなどの被害が出ることも有る。中央部少し西寄りのバニーマタル地方は雨の多い地域であり、かなり南の方のタイズ周辺は年間の降雨量がアラブで最も多く、イエメン農業の中心地である。主要都市として、サナア、タイズ、マナハ (Manākhah)、サアダ (Sa'dah)、アムラン (Amrān)、などが在る。

3. 東部砂漠地域——国土の東半分は広大な砂漠地帯である。ほぼ、その中央にアラビア半島最大のワディ・ハドラマウトを擁し、北はサウジアラビア、東はオマーンだが、砂漠のため国境線ははっきりしていない。一方この地域の西寄りには中央高原地域に継がり徐々に標高を上げ砂の広がりや岩に代る辺りにワディ・ダーナが在り、その中に歴史都市マーリブが在る。降雨量は極めて少なく常に空気は乾燥している。夏季には気温が50℃に達する事が有るが乾燥している分だけ凌ぎやすい。主要都市としてマーリブ、サユーン、タリムなどが挙げられる。

## 住居建築

イエメンで建物と言えればやはり中心は住居建築である。他には、どんな小さな村でも必ず在るイスラム教のモスク (mosque・回教寺院) で、少し大きな町になると高く聳えるミナレット (minaret・寺院の尖塔) の林立が目立つ。軍事施設の建築群も在り、勿論首都サナアには各官庁や純然たる事務所建築、幹線道路沿いには店舗が、又少しは歴史を感じさせる商店の集まりであるスーク(suq)等々、全て建築物であり、観るべきものが多く在るが、最も風土を表象する住居に絞って論を進める。

イマーム (imam) の統治の間、孤立していた結果イエメンは多数の伝統的な居住形態や農村地域の小さな施設を保護してきた。これらは現代社会の影響を殆ど受けていなく、施設配置の地域的多様性や建築様式の豊かな多様性が今も見られる。地元の住民により建てられた家々

は、一般に高い建築水準を示している。異なる居住形態の豊かな取り合わせは国中を通して見られ、住居は完全に異なる気候をもつそれぞれの地域に適しており、生活の多様さに適合している。

かつては、住民は家を建てるために、その土地で利用可能な材料にほとんど完全に依存していた。しかし次第に輸入建材の利用も部分的には広がっていった。例えば、硝子の持ち込みによって壁に小さな孔をあけただけでなく、或いは嵌めるにしても以前のアラバスター (雪花石膏) とオニックス (写真7) を用いるよりも大きな面積が得られ、所謂窓を作ることを可能にした。又、最も顕著な変化はエチオピアやその他の国から長尺の構造材の輸入に伴って生じた。この四角い梁は通常3mを超えることのない地元産の木の幹で造られる部屋よりも大きな部屋造りを可能にした。

しかし、こうした主だった変化を除いて、農村地域での住宅建築は、その他の多くの近代化の波からは殆ど影響を受けなかった。理由は、先ずこの国の地形が鉄道の建設を困難なものとし、未だかつて鉄道線路が一本も敷かれていない事と、悪路が大量の建設資材の運搬の大きな障害となっていたからである。勿論その根底に経済力の問題が有るが結果として、建築に用いられる主要な材料は、依然として地域の地理に依存しており、又地域の地形に依存しているのである。

イエメンの住居タイプについて一貫性のある分類はまだ完成していない (分類体系を使うことが出来ない)。そこで、主要な評価基準として建築材料を取り上げた「Final Report」による分類を以下に示す<sup>(8)</sup>。



写真7

- a. 天幕(khaymah)：真直ぐのポールを立て黒い手織の山羊のウールのパネルで覆った遊牧民の伝統的な住居である。マーリブ州で最も多く見られる。
- b. 洞窟住居(hayd)：トルバー(Turbah)など特に中生代の堆積層のある地域で見られるがイエメン全体でも極僅かである。
- c. 定住型の円形又は方形小屋('ushshah)：木の枝を骨組に藁縄で組立て、葦や木の葉などで丁寧に葺いた住居で、海岸部のティハマ平野などで多く見られ、通常の家に近い形式である。
- d. 仮設小屋：ソルガムの茎か枝を骨組に、藁や布、ブリキの波板などで屋根を葺く。移住してきた労働者などが住む。
- e. 石造りの家：最も普通に見られる住居であり、特に山岳地域に多く見られる。貧富の差、或いは石質によってもこれらの住居は、次のように分類される。  
①無加工の玉石で造られた小屋から、②異なる大きさの粗い切石の住居、③さらに同じ大きさの石で滑らかに合端を合せた壁に仕上げた多層住居まで。
- f. 日干しレンガの家(libn)：ワディ・ジョウフ(Wadi Jawf)、マーリブ、ジュウバー(Jūbah)などの東部傾斜地と並んでアムラン、サアダ、サナアなど中央高地の山間平地に主に見られる。家造りに適した石材のある地域では、普通日干しレンガの家は造られない。日干しレンガの家は普通1～2階建てで、地域の多様な技術に則って、漆喰などで、しばしば装飾が施される。
- g. 土の小さな版(写真8)の積層の家(zabur, hibal)：この種の住居は、バラット(Barat)平原やキターフ(Kitāf)、サアダ、ワディ・カブ(Wadi Khabb)や

マーリブの中の一部で見られる。それらはしばしば6階建てにも及び、美しい装飾をしており、正しくイエメンの伝統的な建築の最も印象的なタイプである。

- h. 焼きレンガの家(yajur)：中央高地の大きな町、サアダ、サナアや海岸部のティハマ平野では多く見られる。日干しレンガは様々な町で作られるが、焼きレンガの生産は定常的な需要を必要とするので、窯は普通人口2000人以上の町に限られる。
- i. セメントの家：農村地域では殆ど見られない。しかし都市部や、特にサナア・タイズ間の道路に沿って、例えばイップ、タイズなどで多くの異なる建築物が見られる。

住居建築の多くの割合を占める石、或いは日干し・焼レンガ及び粘土(compact clay)による組積造(イエメンの人口の80%がこれらの家に住んでいるという調査報告が有る<sup>(8)</sup>)を中心にイエメン建築の特色を挙げる。

前節で記述した様にイエメンでは地域によって2ヶ月にせよ太陽は北側に有る。この事は建築そのもの以前に建物を建てる敷地の決定に大きな影響を与える。例えば日本ではその傾向が顕著であるが、一般的にも北半球の各地では南からの陽光を受ける為、敷地は南傾斜を最良とする。それに対し赤道直下やそれに近い処では東西の方位による違いは有るにしても、南北の方位の意味は失なわれ、従って別の条件、通風とか眺望、等々の敷地選択の他の因子が相対的に大きくなる。又、特にイエメンの西の山岳地帯では水害を避けると共に、歴史的に他民族、他部族の攻撃を防衛する機能が絶対条件として幾百世代にも互って継承され続け、町や村の住居群が丸々全部山頂に築かれた所謂山上都市が数多く在る。一説によるとイエメン人は守りの体制を組む本質を勿論持っているがそれと同時に眺めの良い高い所に住みたいという願望を常に持ち、それらが相俟って高所居住の諸々の不便さ、不都合も苦にならないと言うのが有る。高い処に住む伝統がいつの間にか利点を好みに変えてしまったと考えられる。

方位の無視に近い感覚の影響はそのまま建物自身の形



写真 8





写真 9



写真11



写真13



写真10



写真12



写真14

態にも及ぶ。例えば日本では南面に大きな開口部を設ける事が先ず原則であり、西面や北面の開口は小さい。一方、季節により太陽が南寄、北寄天空を通るとすれば建物の方位性は失なわれる訳で、事実サナアを始め建物が密集して建つ都市に於ては、建物の外観から方位による形態の特徴は見極められない。つまり建物の四面共変化せず同形の姿をしている。

こらは壁の構造材料が石であっても、日干し、その他のレンガであっても同じ事である。只、サナアの様な高地で極端な高い気温にならない地域と、東部砂漠の中の都市で日中最高50℃にもなる様な地域ではそれぞれの窓の大きさは異なるが、それでもそれぞれの建物の四面は同じ表情である(図3・図5)。乾燥した極端に高い気温の地域で大きな開口を設けてしまうと、建物の外壁がシェルター(保護膜)の役目を果さなくなる為、いきおい窓は小さくなる。外気の温度を遮断するためには壁は厚い方が良く、これも窓を小さくさせる方向に働く。

先に述べた住居の防衛に関する機能は住宅の内部構成にも反映され、そしてそれは町でも農村でも基本的には変わらない。つまり安全の為、人は3階以上に住む。1階

は家畜用で窓は無く、小さな換気孔が上の方の壁に一・ニヶ所有のみで暗い。入り口は人が屈まなければ入れず、敵の突入を防ぐ。石の大きさの都合で一段一段高さの違う階段をコの字型に昇って2階に到ると、そこは穀物貯蔵庫として使われる。この階は天井が低く、窓も石一個分が数ヶ所有のみ。3階から上が人間の居住空間になるが、台所とトイレ以外は全て居間(写真9)である。イエメン人の住まいでの生活は居間で食事をし、話をし、雑務をし、そして眠る。西欧式、或いは昨今の日本の様な用途別の部屋は存在しない為、室内は極めて単純で、全ての居間の家具類も絨毯と肘掛クッションくらいである。毎日の生活は直接床の上で行い、階段迄は土足であるが、居間に入る時に靴を脱ぐ。寝る時は床にマットを敷き(写真10)、毛布にくるまる。男の部屋と女の部屋の区別は明確に決っており、階数で男女分けている場合も有る。これはイスラム教の教えによるもので、同居人以外の来訪者が有った時にも男女が顔を合わさない様にする為である。

他に、特別な部屋として最上階にマフラージ(写真11)と称する応接間が在る。窓が大きく開いて眺めが良く、

客を持て成す。披露宴、カート・パーティーなどにも使われ、この部屋がいかに立派であるかがその家の誇りと格式にかかわる。かつての日本建築で座敷と呼んでいた部屋に相当する。

斯様な住居の殆どは5・6階建てであるが7・8階建てのものも相当有り、サナアや西の山岳都市では2階迄が石積み、或いは全て石積みであるが、東部ワディの都市では全て日干しレンガ、或いは全て粘土で造られた8階建てとなり、これはやはり驚嘆に値する。地震が無い事も勿論、大きな理由であるが、前述のイエメン人の高さに対する好み感覚は山頂ならずとも、盆地や平野でも踏襲されていると考えられる。

都市住居の施設で台所(写真12)も特徴は色々有るが、特に注目すべきは便所である。一般に都市住居では便所は3階以上に設けられている。用便のスタイル自体は特別珍しいものではない。所謂西洋式と呼ばれる腰掛式ではなくて、むしろ和式に近い。アラビアン・スタイル或いはターキッシュ・スタイルと総称されるものである。和式はいわば床面に穴を開けただけのものと言えるのに対して、イエメン・スタイルは糞・尿分離式の穴・溝から成る(写真13)。その構造の故にそのまま人間生活、食物連鎖の一端を担う形式となる。即ち液体の方は石の溝、樋そして外壁の窪み(写真14)を伝って地面に達し、乾いた地表に即座に吸い込まれる。空気が乾燥しているの



写真15



写真18



写真22



写真16



写真19



写真20



写真17



写真21

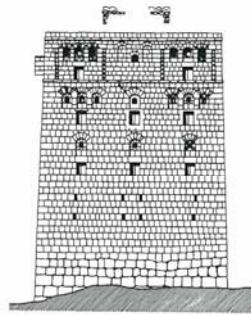


写真23

dwelling in Dharhan  
 age : approx. 140 years  
 inhabitants : 4 families, 20 people  
 profession : farmers

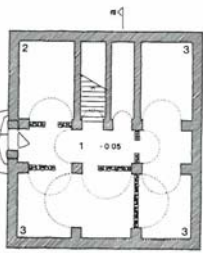


- 1 entrance
- 2 storage
- 3 animals

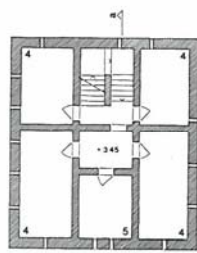


north - west elevation

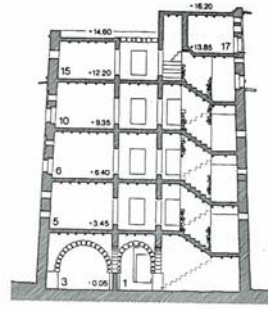
- 4 storage
- 5 kitchen (first floor no longer inhabited)



ground floor

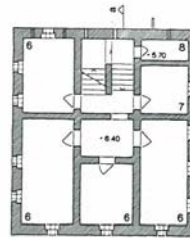


first floor

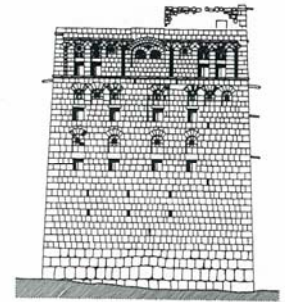


cross section a - a

- 6 storage
- 7 kitchen
- 8 lavatory / toilet (only a part of the second floor is inhabited)

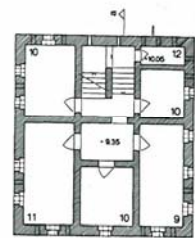


second floor



south - west elevation

- 9 living - room
- 10 bedroom for women
- 11 bedroom for men
- 12 lavatory / toilet



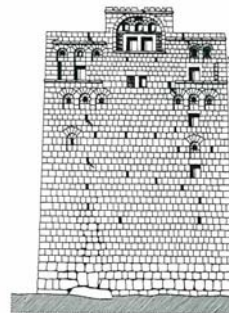
third floor (2 families)

図 3

で臭いは殆どしない。一方固形物は何階からであれ一気に一階まで落ちて、家畜の糞と一緒にになる。この人畜混合糞はハンマーム（公衆浴場）の燃料として供給される。薪は炊事用として貴重であるからハンマームには使用しなかった。さらに糞の燃えかすと灰はブスターン（菜園）に回され肥料になる。衛生問題も同時に解決し、都市の完璧な燃料自給システムである。かつてサナアが攻められ市壁の中で籠城中も市民は風呂に入っていた。

以上を踏まえて、イエメンの特徴ある都市を具体的に取り上げ、写真と数点の図版で示す。

1. **ワディ・ダハール (Wadi Dahar)** : 都市というより首都サナア郊外の緑の溪谷の町と言った方がふさわしい。サナアの北西約15kmに周囲を赤茶色の山で囲まれた小さなワディは谷底の緑のオアシス（写真15）の感がある。1930年代にイエメンを支配したイマームの夏の別荘とし

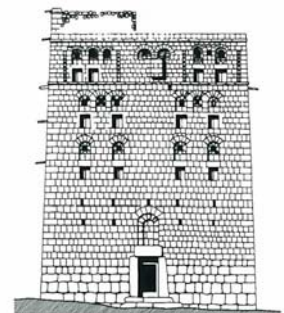


south - east elevation

- 13 bedroom for women
- 14 bedroom for men
- 15 kitchen
- 16 kitchen storage

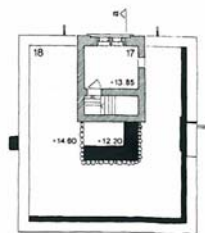


fourth floor (2 families)



front elevation north - east

- 17 living - room
- 18 roof terrace



fifth floor





写真26



写真24

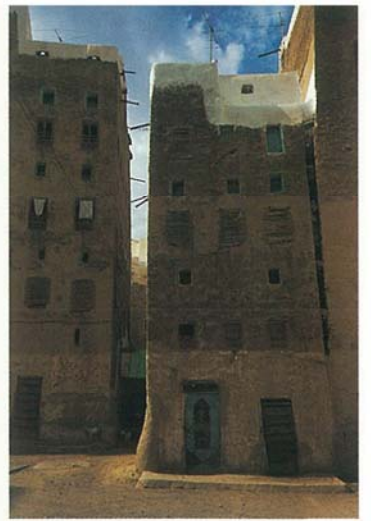


写真29



写真27

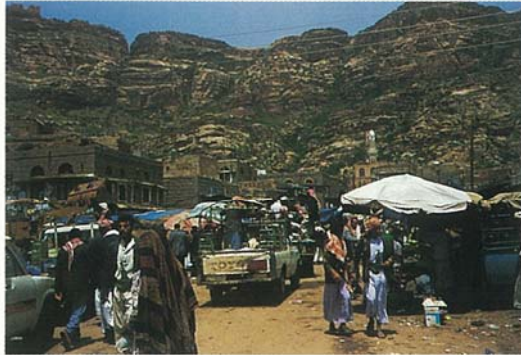


写真25

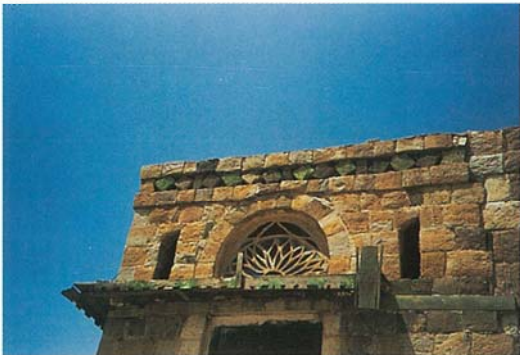


写真28



写真31



写真30

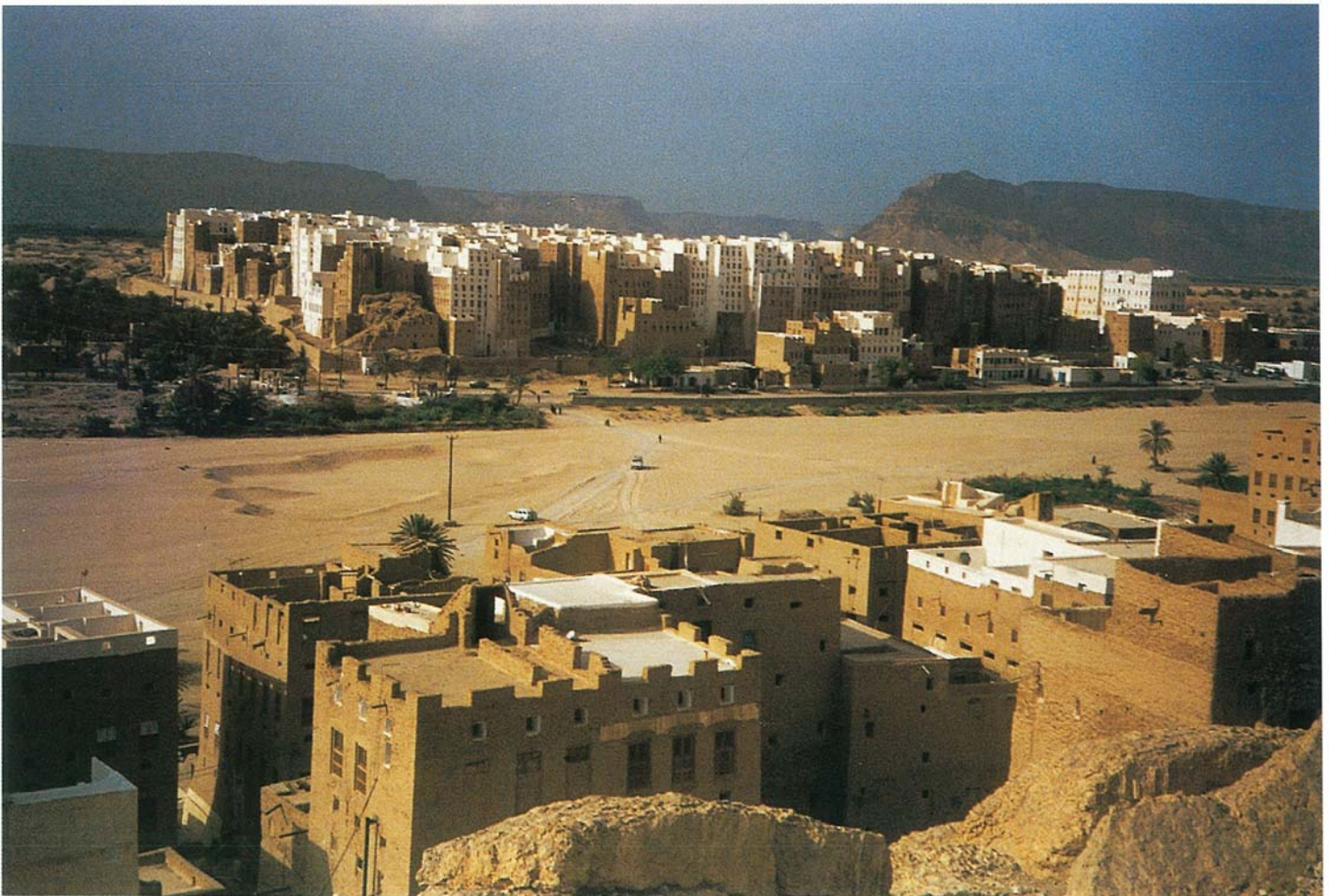


写真32

て使われた建物（写真16）が残って居り、ロック・パレスの名で現在博物館として使われている。変り種としては、監視塔に付加された住居（写真17）が極く普通の農家（写真18）の点在する中に異彩を放っている。

**2. 山岳都市ハジャラ(Hajjarah) :** サナアの南西バニー・マタル地方で標高2300mの険しい山の頂上全体の岩の上に玄武岩や花崗岩を積み上げた所謂組積造の住居群から成る町である。崖下の斜面にはウチワ・サボテンが生い茂り、外敵の侵入を阻み、建物の1階には換気用の孔のみで窓が無く（写真19）、垂直の壁の4から6階建てで、町の入り口は一ヶ所しか無く（写真20の中央左下）、勿論門は堅牢に造られた要塞都市である。

12世紀オスマン・トルコの占領時代には、要塞として重要な役割を果たした。1000年前からこの形は変わらない、というよりイエメン中央部山岳都市の典型である。自然の岩山から直接組積造の建物の基部がそのまま始まるディテールは美しい（写真21）。裏側周辺部は比較的低層建築（写真22）も有るが、崖は一層高く、険しく、町中の通路は当然狭く、昇降が有り、住居の入り口にも段差が有る場合が多く（写真23）、判りにくいものが多い。

**3. ダルハーン (Dharḥān) :** サナアの北西にアムラン (Amrān)、レイダ (Raydah) 等の中規模都市を含むジ

ャバル・アッイアル・ヤジド (Jabal 'Iyāl Yazīd) と呼ぶ中央山岳高原地域の一つが有るが、その中の小さな町ダルハーンの住居実測図を示す。（図3 出典：Final Report）同図はダルハーンでの実測であるが、階数の相違は有っても、先のハジャラなどをも含め中部山岳高原地域での住居の典型の一つである。

**4. 双子都市シバーム (Shibam) とコーカバン (Kawkabān) :** サナアの西、標高2500mにシバームが在る。周辺には耕地が広がる農業と付近の商業を支える都市（写真24・25）である。特異なのは直ぐ背後の350mの崖の上の町コーカバン（写真26・27・28）に同じ民族が暮らしている事である。コーカバンは軍事を担当し、常に敵の接近を監視する。シバームは敵に襲われると、人々は山を駆け登りコーカバンの人々に助けを求める。二つの町の住人は1年に一度集まり、互いの無事を確認し合う。この行事は1000年を経た今も祭りとして続いている。

**5. ワディ・ハドラマウトの中の都市シバーム :** イエメン東部の砂漠の巨大なワディに在る都市の一つで、世界最古の摩天楼都市と言われる。5から8階建ての石と日干しレンガの組積造の建物が密集しており（写真29）、建物の間は路地（写真30）が多く、車の通れる道は少い。日干しレンガや粘土で高層の建物全てを造る場合、その



写真33



写真35



写真34



写真36

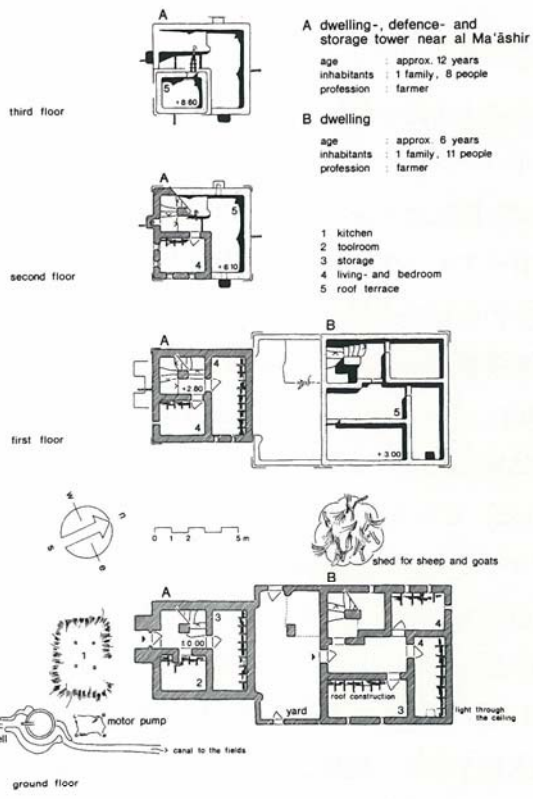


图 4

**defence and storage tower of Huşin as Surayhi**  
 age : approx. 12 years  
 inhabitants : 1 family, 5 people  
 profession : farmer and tower-guard  
 (the tower belongs to the inhabitants of the village)

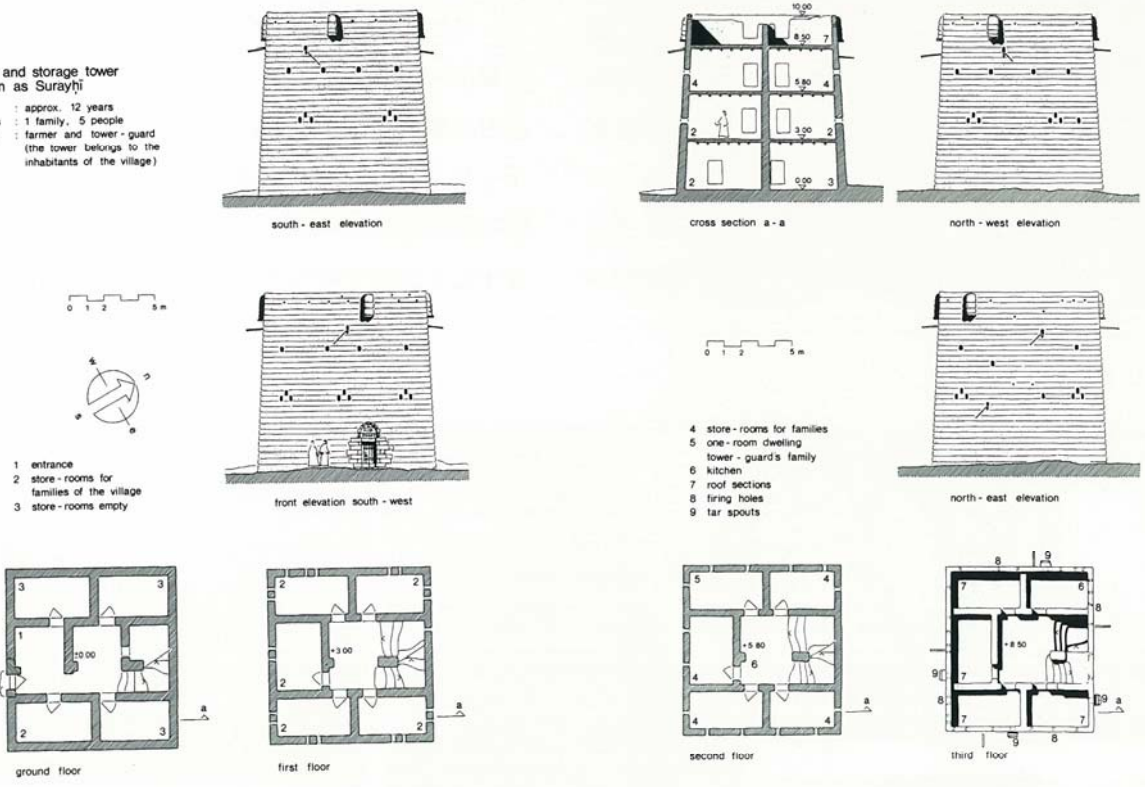


图 5

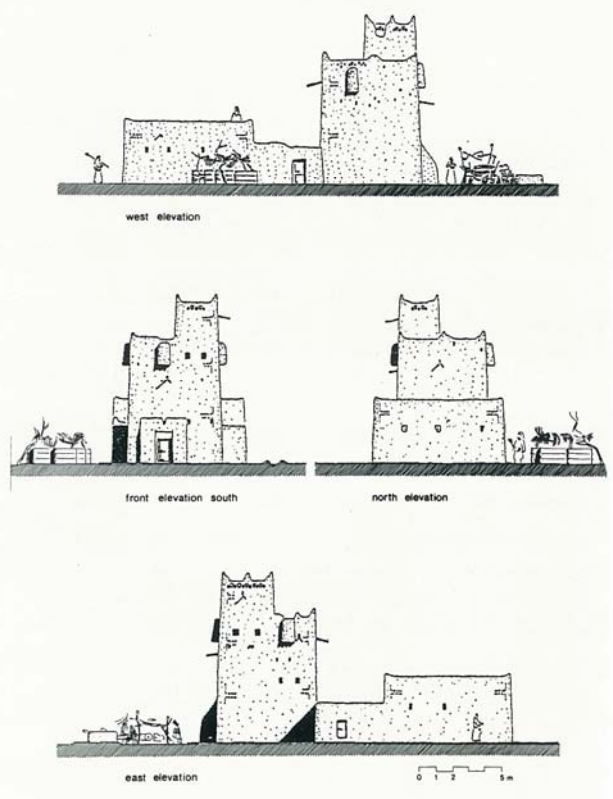


写真37



写真38



写真41



写真40



写真39



写真42

壁の基部は構造上相当厚く、中には木製筋違様の突っ張り補強をして粘土で覆っているものも有る(写真31)。ユネスコの世界遺産に登録され保存されている。500程有ると言われる建物が密集した町は遠くから見ると全体で大きな一つの建物のようにも見える(写真32 遠望が旧市街で手前側が新市街、間の砂の部分は雨季には川となる)。

**6. オールド・マーリブ**：5万の人々が生活したと言われる街も今は廃墟(写真33・34)と化し、数家族が住む(写真35)のみで昔日の情は兎も角、少なくとも生物、生態系に有害な物が残らないことは、我々に指箴しんを与えてくれる。今、遠望すると(写真36)街全体が土の小高い丘の様でもあり、それは丁度人間が自然の小山の土を削り取って住まいを造り、後にその住まいに居なくなると元の小山の形に戻ると言う、人類が他の生物と同じ全く自然の一部であった時代を想起させる。

**7. マアーシュル (Ma'āshir)、フスウン・アッシレイヒー (Huṣūn as Surayhī)**：いずれもワディ・ダーナの中の小さな村でありマーリブの北東7km程でマアーシュルが、更にそこから6km程北東にフスウン・アッシレイヒーが在り、それぞれの村に在った住居の実測図を示す。

(図4・図5 出典：Final Report) いずれもワディ・ダーナ地域で多く見られる住居形態である(写真37)。

**8. 首都サナアの旧市街 (Old Sana'a)**：標高2300mの高地に在る都市で、現在も人が定住している町としては世界最古である(写真38)。旧市街は市壁に囲まれていて、その市壁(写真39)の一部はユネスコの「サナア旧市街保存計画」の援助を得て修復されている。市壁に在る入り口門で現在唯一残っているイエメン門(Bab Al Yaman)から始まるスーク(写真40)を中心に、その回りを住宅地が取り巻く。サナアの住居も5、6階から8階建ての搭状が多く、流石に様々な形式、材料が見受けられるが、特徴を挙げるとすれば、壁材に2階迄は石を使い、その上階を日干し、又は焼レンガの組積造という構法(写真41・42)が比較的多く見られる。

## おわりに

本論のはじめにイエメンに対して、何故親しみや魅力を感じるのか、と設問したが、先ず考えられる答の一つは、前節でオールド・マーリブの廃墟に触れて、生物に

有害な物が残らない。建物が在った筈の処がその前の土の丘に戻りつつあると記した。つまりこれはほんの100年余り前、日本の建築が紙と木と土で出来ていると言われた頃、所謂化学的製品を余り用いないでいた時代、自然界の他の生物と人間の差が余り無かった時と同じである。そしてそこから受ける感覚としては懐古的な感傷と考えるより、人間もやはり生物の一端であるという至極当然な安心感に因ると考える方が素直である。

又、イエメンには鉄道が全く無いとは云え道路網が整備されつつあり、即ち、いづれ大量輸送の時代が来て建築材料も新建材に取って代わられる恐れが全く無いとは言えないが、イエメンの或る意味では苛酷な気候と険阻な地形がそれ程簡単に克服されるとは考えられない。つまり、変化するにしても性急に、とは考え難い。

次に答の二つ目を論述する。宮川英二はエドゥアルド・マイヤーの言葉を引用しながらイスラム、アラブの民を総称して、『想像力や創造的な動きも少なく、文学は乾燥し、美術、哲学も生まれぬ。』とし、又『偶像否定の伝統があるから、砂漠の芸術はみずみずしい印象的なものではなく、幾何学的な抽象文様に終始する。その代表がイスラムの宗教芸術アラベスクである。』と述べている<sup>(10)</sup>。尤も論理の要が和洋の比較文化論にあるようで、引用にも記した通り、アラブと云っても砂漠の民を指しているので、緑を含むイエメンにはそのまま当て嵌まらないが、イエメンの建築や他の工作物を見る限りに於て、組積造の所為が大きいと考えられるが、幾何学的な文様、或いは、芸術はみずみずしい印象的なものではなく、の語句は当を得ていると考える。一方、日本の他の分野の芸術性はともかく、伝統建築の範疇に於ては同様の事が言えると考え。つまり、日本・イエメン双方共、芸術性が無いなどとは勿論、言わないが、いづれもその根底に職人技とでもいうべきものを含んでおり、景観との一致調和を生み出していると考え。この共通点がイエメンで人の手が加えられた風景に接した時、親しみや魅力を感じたと考える。

しかし、イエメンの風土について考察する場合、初めにも触れた通り、イスラム教の影響を除外しては結論を誤る恐れも有るが、本稿枚数ではとても無理と考え次稿

の機会に譲る事とした。

歴史の節で触れた、イエメン人の名誉を重んずる民族性は現在も続いている。ジャンビーア（半月刀）の帯刀にもそれが伺える(写真43)。今は装身具の一部であるジャンビーアをさしたイエメン人の姿は、形は全く異なるが、髷を結び日本刀をさし、儒教精神に支えられた名誉を重んずる近世日本の侍の姿と重なり、西欧社会の規範からは滑稽に見えるであろうが、幸福のアラビアが未だ続いている証に見える。

性急な変化を避けて貴重な歴史そのものを生きた状態で残す事が出来るなら、近い将来、残っている事の素晴らしさに世界中が気付く、即ち、それが真の意味でのイエメン人の誇りとなる。



写真43



## 引用・参考文献

- (1) 清水正之 「アラビア・アフリカの自然と風土」 (財) 日本造園修景協会 大阪・和歌山支部 1998. 3 p.2
- (2) 佐藤寛 「イエメン——もうひとつのアラビア」 アジア経済研究所 1994 p.16-18
- (3) 佐藤寛 「季刊 民族学 61号 イエメンの道」 p.8・12-13
- (4) 荒木正典 「アラビア・アフリカの自然と風土——イエメンの建築とそれを生んだ環境散歩——」(財)日本造園修景協会 大阪・和歌山支部 1998. 3 p.25
- (5) 佐藤寛 「イエメン——もうひとつのアラビア」(前出) p.307-309
- (6) 清水正之 「アラビア・アフリカの自然と風土」(前出) p.1-2
- (7) 荒木正典 「アラビア・アフリカの自然と風土——イエメンの建築とそれを生んだ環境散歩——」(前出) p.24
- (8) The Airphoto Interpretation Team of the Swiss Technical Cooperation Service 「Final Report」 1978. 4 P.I/17-18. I/127-129
- (9)-① 芦川智+昭和女子大学 芦川研究室 「SD」 9609 「イエメン：山上の都市と塔の家」 鹿島出版会 1996. 9 p.87  
1. 紅海、アラビア海に接する低地部分、2. サヌアを中心に南北に広がる3000m級の山が連なる中央高原山岳地帯、3. ハダラマートの谷を中心とする砂漠地帯である東部地域、4. 第2と第3の間に広がる東部丘陵地で、山岳から砂漠へ移行していく中間地帯、
- ②地球の歩き方編集室 「地球の歩き方、アラビア半島編」 ダイアモンド・ビッグ社 1996. 9 p.229-230  
1. 山岳地方、2. 紅海沿岸、3. アラビア海沿岸、4. 砂漠地方
- (10) 宮川英二 「風土と建築」 彰国社 1986. 4 p.58-59